平成26年度　学校評価総括表　　**奈良県立郡山高等学校**

教育目標	幅広い知識と教養、正しい判断力と自律的な生活態度を身に付けさせるとともに、豊かな人間性や社会連帯の精神、国際社会に生きる資質を養うなど、民主的で平和な社会の創造と発展に貢献できる人材の育成を目指す。		総合評価
運営方針	「誠実・剛毅・雄大」の校訓の精神と文武両道を奨励する校風のもと、個々の生徒の自己実現に向けて、確かな学力の定着を図る指導、自主的な学習態度や自律的な生活態度を高める指導の徹底を図る。		
○昨年度の成果と課題	本年度重点目標	具体的目標	
家庭学習の重要性を訴えているが、生徒の認識としては不十分。そのため、課題を積極的に与えているが、課題についての教科内、教科間の連携がスムーズにできず、時によっては生徒の負担になりすぎることもあった。量的、質的な改善のため、教員間での日常的な連携が大切。	確かな学力の養成	第1学年から予習、復習を習慣化させ、学力の定着を図るとともに、指導者としての授業力を校内研究授業等を通して向上させる。	B
	早期からの進路指導の充実	第1学年から進路に関する情報提供を充実させ、自己を客観的に見つめる中から将来の進路を考えさせる。	
	基本的生活習慣の確立と自己管理能力の育成	遅刻の削減。校内外の生活全般にわたってルールやマナーを身に付けさせる。自らの健康や安全を確保する能力と自立心を養う。	
	学習と部活動のバランスの取れた両立	教科担当者、部活動顧問が常に連携し、効率的な部活動となるための工夫を図るとともに、学習においては集中力を養い、目標を貫徹する強い意志力を育てる。	
	豊かな人間性の育成	学校行事や生徒会活動等の精選と充実を検討する。創立120周年記念事業を契機に創意工夫する意欲と態度を育てる。	

評価項目	具体的目標（評価小目標）	具体的方策	評価指標	年度末（3月）自己評価		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
育友会	育友会活動の活性化を図る。	文書やホームページ、メール連絡網の活用、育友会総会後の行事の充実により総会参加者を増やし、満足度を高める。	参加者の満足度・よかった70%以上A、60%以上B、50%以上C、それ以下はD。	A	A	行事の日程変更もあったが、参加者の満足度も非常に高かった。全国大会応援の対応も適切におこなえた。	総会の人数を増やしていけるよう内容を吟味していきたい。	育友会活動に関する学校の取組と自己評価に同意する。 なお、食堂の利用活性化に向けて、育友会、育友会担当教員、生徒会役員等で今後協議するので、協力をお願いしたい。
		内容や行き先を精選し、育友会主催の研修会（講演会・社会見学）への参加者を増やし、満足度を高める。	参加者の満足度・よかった70%以上A、60%以上B、50%以上C、それ以下はD。	A		講演会・大学社会見学ともに前年並みの参加があり、満足度も非常に高かった。	参加希望者が多くなっていることに対応する。	
授業の充実	平素の授業の充実と授業研究週間・公開授業の活性化を図る。	授業研究の活性化を図るため、授業研究週間等を活用して授業方法を研究する。	今年度に入って授業研究の活性化が図れたと答えた職員が9割を超えればA、9割～6割ならB、6割～4割ならC、4割未満ならD。	B		今年度の授業を振り返って、昨年度より授業研修ができたか、という質問に対して、「できている」「どちらかといえばできている」をあわせると79%、「できていない」「どちらかといえばできていない」をあわせると21%であった。	授業研究は教員としての力量を高める上で重要なポイントである。授業研修が「できている」と回答した教員は17%とにとどまっており、本年度以上に来年度も授業研究が活発になるよう授業研究の環境整備に努めたい。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も生徒たちの変化に対応できるように研修を積んでほしい。そして、その成果を市内の小中学校にも広めてもらえば、地域の連携にもつながる。
進路指導	キャリア教育を推進する。	キャリア教育に関する講演等において働いている人の話を直接聞く。 「郡高キャリア通信」の中で、進路選択、大学情報や入試情報、大学での研究内容や卒業後の進路等、将来の自己実現に繋がる情報を発信し、キャリア教育の充実に役立てる。	キャリア教育に関する講演等の感想において、とても良かった、良かったの割合が7割以上ならA、5割以上ならB、3割以上ならC。3割未満ならD。実施しないときは「郡高キャリア通信」の発信によって評価する。	A	A	「Professionalsに学ぶ」の感想が良かった以上の割合が高くA評価であった。「郡高ｷｬﾘｱ通信」は6月以降月1回のペースで発刊し、ｷｬﾘｱｻﾎﾟｰﾀｰにより進路選択やｷｬﾘｱﾃﾞｻﾞｲﾝ等ｷｬﾘｱ教育にかかわる多くの情報と大学情報を発信し、生徒の意識の向上を図ることができた。	生徒の進路希望や進路状況に対応した情報の発信を継続、ｷｬﾘｱ教育をより一層推進する。また卒業生とのネットワークを更に充実させ、キャリア教育の充実に役立てる。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も取組のさらなる充実を期待したい。
	進路意識の向上を図る。	進路HR、進路だより、進路集会等により自己の進路目標の実現に向け、早期に学習を開始させる。	進路目標実現に向けた学習の開始時期が、過半数の生徒が、2年2学期までA、3学期までB、3年1学期までC、それ以降D。	B		進路HR、進路だより、進路集会等により「進路目標の実現に向けての学習」を意識させることができた。高い進路目標を持ちながら、その実現に向けた学習の本格的な開始時期は1・2年とも先延ばしする傾向がある。	進路集会による情報提供、模試やｾﾝﾀｰﾁｬﾚﾝｼﾞによる実力の確認により、進路実現に向け意識を向上させ、より早期から学習に取り組ませる。	
		第1学年より進路希望調査を実施し、進路目標を明確にし、センター試験・2次試験に向けての教科学習を早期に開始させ、最後まで第1志望を堅持させる。	センター試験7科目受験率70%以上A、65%以上B、60%以上C、60%未満D。	A		ｾﾝﾀｰ試験7科目受験率はｾﾝﾀｰ受験生徒を母集団として71.1%であった。国公立大学志望生徒が7科目型でｾﾝﾀｰ試験を迎えられるよう、1・2年次における基礎力、特に数学、英語の基礎学力充実が課題である。	1・2年次において授業への真摯な取り組みにより学習内容の理解・深化をはかる。家庭での予習復習の習慣化により、基礎力の徹底を図る。	
	学力の向上を図る。	模試成績を分析し、進路対策委員会と教科が連携して学力向上の具体的方策を検討し、その実行により進路目標の実現を図る。	学年の初回と最終回の模試全国偏差値の差が 0以上A, −3以上B,−6以上C,−6未満D。	A		校外模試全国偏差値の推移は、1年が−0.7、2年は+0.5、3年はﾏｰｸ+2.6、記述+3.7で、1年B、2年A、3年A評価である。1・2年次における全国偏差値の低下を抑えることが課題である。	対策委員会と教科・学年が連携し課題を明確にし、対策を着実に実行に移し継続的に指導する。	

評価項目	具体的目標（評価小目標）	具体的方策	評価指標	年度末（3月）					
				自己評価		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
生徒指導	生徒の基本的生活習慣の確立と規範意識の向上、道徳観の育成をはかり、充実した学校生活を送らせる。	毎日の登校指導や授業、学校行事等を通じて挨拶の励行と正しい制服の着用を促す。	挨拶に関するアンケートを実施し、教員や来校者に対して85%以上の生徒ができていると判断した時A、80%以上B、75%以上C、それ未満はD。服装に関するアンケート項目を新設し、正しく着こなしているとの回答が95%以上ならA、85%以上B、75%以上C、それ未満はD。	A・B	B	自ら挨拶する生徒は98%、毎朝の登校指導においてもここ数年に比べ良好であると感じられる。今年度新設した服装に関する質問において、制服を正しく着用しているとの回答は86%であった。挨拶は人間関係構築の入口であること、制服の正しい着こなしは周囲の評価のスタート地点であることを様々な機会を見つけて訴えていきたい。	はきはきした元気よい挨拶と正しい制服の着用を、生活委員や部活動に率先してもらう等、生徒主体に進めていきたい。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も社会人としての規範意識を持った生徒を育成する取組の充実を期待したい。
		月2回以上遅刻した生徒には集会に参加させ、学級担任・副担任と連携しながら自ら時間を守るという生活習慣を徹底させる。	集会に参加する生徒（不注意の遅刻が月2回以上）の人数が学年平均で5人未満がA、5人以上7人未満がB、7人以上10人未満がC、10人以上がD。	A		延べ人数で第1学年7名、第2学年14名、第3学年20名、1か月の学年平均数は3．41人となる。前年度より減少している。遅刻指導には、前年度より担任・副担任も入って指導を行っている。遅刻により、皆に迷惑をかけていることを自覚させたい。	8時20分着席を推進して6年目となるが、全く守れていない若干名に対し5分前にクラスが始まる大切さを訴えていきたい。	
		各学期2回と月1回頭髪・服装点検を実施し、学年主任・担任・副担任と連携を取りながら継続的に指導する。	学期の点検時に指導が必要な生徒が全体の0．5%未満がA、0．5%以上1%未満B、1%以上1．5%未満C、1．5%以上D。	B		延べ人数で第1学年2名、第2学年3名、第3学年2名、全校生徒に対する比率は0．57%である。継続指導により違反生徒を根絶させたい。	登校指導のほか、SHRや授業等で全先生方に足並みの揃った指導をして頂けるよう年度当初に徹底したい。	
		生徒の生活意欲を喚起するため、「今月の言葉」を掲示板及び教室に掲示する。内容をさらに精選し、自らのよりよい生き方・在り方を考えさせる機会とする。	内容に興味・関心をもつものがあったと答えた生徒が全体の60%以上がA、50%以上がB、40%以上C、それ未満はD。	C		興味をもつとの回答は46%である。約半数が何らかの関心を示すことはある意味評価できる。各学年若手教員から出して頂くなどの工夫をさらに進めたい。	生活委員等生徒から出してもらうなどの方策を検討したい。	
特別活動	個々の生徒がそれぞれのシーンにおいて、その立場および責任を理解し、自主的・自発的な活動のもとに創造的な能力が発揮される生徒会活動になるよう支援する。また、郡高生としての帰属意識・愛校心を高めるとともに、地域との連携・調和を図る。	各学校行事においてそれぞれの生徒が各々の立場で輝けるよう、生徒会役員を中心に十分な計画・準備を行い、その都度チェック・反省を繰り返しながらより良きものとなるよう指導する。特に文化祭は、文字通り「生徒の文化」の結晶となるよう文化祭実行委員会を通し、全校生徒がアイデアを出し合いながらオリジナリティー溢れる行事となるよう支援する。	生徒実態調査により、文化祭において、まわりと協力しながら想像力溢れる文化祭になるよう努力できたとする生徒が80%以上A、60%以上B、45%以上C、それ以下D。	A	A	生徒実態調査において、各学年とも90%以上の生徒が創意性を発揮して努力したと回答している。昨年にもまして新しい企画にも挑戦し、結果を残すことができた。3年生や文化祭実行委員の中で充実感や達成感を感じているものが多くを占めている。しかし、一部で決まり事やルールを守れない者もおり残念な部分もあった。2年生や1年生でもリーダーシップを発揮し、生徒会活動を盛り上げる生徒もおり来年以降が楽しみである。	来年度に向けて、各部門のリーダーを育成する。また、文化祭実行委員会の取り組みを生徒にしっかりと浸透させるよう努力する。	本年度は120周年記念事業、サッカー部の全国大会初出場等、学校としての盛上がりの意識が高かった。次年度以降も「文武両道」の意識の向上に向けた全校体制の取組を継続してほしい。
		生徒会報を年間6回以上発行を目標とするが、発行回数よりもその内容を充実したものにするため指導していく。会報を通して生徒会執行部および各課委員会の方針、活動内容を全校生徒に伝え、より開かれた生徒会活動を目指す。	年間6回以上の充実した会報の発行と、それにより生徒会活動に興味を抱いた生徒の割合が70%以上A、生徒会活動に興味を抱いた生徒の割合が50%以上B、逆に会報をあまり読まないと答えた生徒が50%以上C、それ以下D。	A		生徒会報に興味を示し、目を通しているという生徒が昨年と比較して約6%（一昨年と比較すると約16%）上昇し、担当の生徒会役員が様々な企画を出し合いながら、親しみやすく読みやすい会報を作成していることと思われる。今後も一層、紙面作りに工夫を加え、さらにその内容を充実していきたい。	よりタイムリーで生徒に身近な校内でのトピックスや学校行事など、郡高生の声をより反映させたい。	
部活動	各部活動において、心身ともに健全な生徒の育成を目指しながら、文武両道の伝統的な校風の維持発展に努める。また、活動場所や部室等の環境整備により、体力および競技力の向上が可能となるよう支援する。	「文武両道」とは勉学と部活動が両輪の輪となるべきものである。部活動偏重になりがちな1・2年生に対し、勉学と両立しながら競技力を向上させることにより、将来実りある進路実現が達成されるよう指導していく。また、強い精神力と忍耐力を培いながら、あいさつやマナー等の重要性を指導する。	生徒実態調査により、部活動を通して精神力、体力、学力が向上したとする生徒が70%以上A、50%以上B、35%以上C、それ以下D。	A		生徒実態調査において90%近くの生徒が部活動を通して自らの精神・体力が向上したと回答している。特に3年生で高い数値を示しており、自己肯定感の高さが窺える。また、所属する部活動に対する満足度も90%を超えており、部活運営もよい状態にあると思われる。しかし、クラブ加入率9割の本校では、部室やその他の環境整備という点で多くの解決困難な問題がある。	今後も精神・体力を向上させ、全人的に成長していけるような指導を目指したい。活動環境については、物理的・金銭的な問題があるので全面解決は不可能であるが、少しでも生徒がよりよく活動できるよう工夫したい。	

評価項目	具体的目標（評価小目標）	具体的方策	評価指標	年度末（3月）					
				自己評価			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
人権教育	人権HR活動を充実させる。	正しい判断力と自律的な生活態度を身に付けるため、ワークショップ等を取り入れた生徒参加型のHR実践を行う。	各学年いずれかの学期にワークショップを導入できればA、2つの学年で導入できればB、1つの学年のみ導入C、どの学年も導入できない場合はD。	A		B	ワークショップ型のHR活動を通じて、自己の意見を明確に持ち、他者の意見を尊重する姿勢が身についてきている。多くのHR活動に取り入れていけるよう指導案の作成が課題である。	各学年の指導案を工夫すると共に、ワークショップ型HRの指導方法について、研修会等を行う。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も取組のさらなる充実を期待したい。
	推進体制の充実を図り、教職員の実践力を高める。	人権教育に関わる夏期研修会等、各種研修会への参加を促す。	前年度に研修会に出られなかった先生方の50%以上が参加A、30%以上が参加B、20%以上がC、それ以下D。	A	B		趣旨を理解いただき3年間で大半が1回は研修会に参加できた。今後も案内並びに、参加の呼びかけを行う。	次年度は別の課題について取り組む。	
		教職員の実践に即した職員研修を計画し、実施する。	事後アンケートを実施し、HR実践等への参考になったが80%以上A、60%以上B、40%以上C、それ以下D。	A			研修会後のアンケートで参加者の全員が概ねも含み参考になったと回答した。	職員研修が、常にHRの実践につながるよう計画していきたい。	
		人権教育関係の回覧を充実させ、教職員自らが人権問題について認識を深める。	教員アンケートで県推進委員会、県外教等の資料の回覧をしっかり目通しできた60%以上A、40%以上B、20%以上C、それ以下D。	C			アンケートの設問を前年度と変更し抽象的になったため、「どちらともいえない」の選択が多かった。回覧は、人権問題に関する重要な情報であることを認識して頂けるように努める。	重要なものはマーカーする等して目に付くようにする。また、評価指標・アンケートの設問を明確なものにする。	
	生徒・保護者への人権啓発活動を充実させる。	人権教育部だよりを作成し、教室掲示及びHPへの掲載を行う。	年間に5回以上作成できればA、3回以上B、2回以上C、それ以下D。	C	B		多忙を理由に発行が遅れてしまった。各学期に2回発行が課題である。	編集・発行方法を見直し、必ず発行するように努める。	
		豊かな人間性や社会連帯の精神を身に付けるため、学校での講演会の開催。外部の各種活動・研修会等への参加を促す。	生徒が校内の講演会も含め、各種活動・研修会等へ6回以上参加すればA、4回以上B、2回以上C、それ以下D。	A			毎年、生徒会、家庭クラブ等が中心になって活動してくれている。人権に関わる研修会等への参加も呼びかける。	次年度は別の課題について取り組む。	
教育相談	生徒が個々の力を十分に発揮するために、柔軟で多様な考え方や感じ方ができるよう支援する。	生徒用「相談室だより」を年3回発行する。	年3回発行できればA、2回でB、1回でC、0回でD。	A		B	3学期には本校スクールカウンセラーにコラム原稿を依頼して掲載するなど、紙面の充実に努めながら3回（各学期に1回）発行することができた。その時々の生徒の状況に即した内容を盛り込み、興味をもって読んでもらえるようにすることが課題である。	紙面を通して、予防的・開発的な関わりができるよう、生徒の状況を的確に把握する。	不登校に陥っている生徒だけでなく、サポートを必要する生徒への手立てに最善を尽くしてほしい。
	教員の教育相談に関する知識と理解を深める。	生徒理解のための参考となる情報として、教師用「相談室より」を毎月発行する。	教員アンケートにおいて「概ね目をとおしている」80%以上がA、60%以上がB、40%以上がC、それ以下はDとする。	B			教員アンケートの結果、「概ね目をとおしている」が66%であった。もっと読んでいただくための工夫をすることが課題である。	有用な紙面となるよう、引き続き種々の情報にアンテナを張るとともに発行するときは職朝連絡でお知らせし、また月例の学年会議のときに資料の1つとして提供する等の改善策を実施したい。	
保健	生涯を通じて健康な生活が実践できる力を育成する。	保健通信を活用しながら、怪我・疾病予防など健康への関心を高める。	生徒実態調査において、「保健通信を読んで怪我・疾病予防などに生かせた」が、60%以上A、40%以上B、20%以上C、それ以下D。	B		B	生徒実態調査で「毎月読んで、怪我や疾病などの予防に生かした」および「気になる内容については読んで、怪我や疾病などの予防に生かした」と回答した生徒が合計51．8%となり、評価「B」とする。	生徒が健康の保持増進を実践できるよう、実態に応じた興味・関心をひく内容を保健通信で取り上げる。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も取組のさらなる充実を期待したい。
体育	たくましい体力、活動の充実を図る。	体育に関する行事「新体力テスト・体育大会」を実施し、体力の向上および活動の充実を目指す。	生徒実態調査において体育に関する行事に自己の能力を発揮して活動したが、80%以上A、60%以上B、40%以上C、それ以下D。	C			体育行事において、実力を発揮しましたかについて、「十分に発揮した」と「発揮した」の合計割合が58．3%となり、評価は「C」となる。体力に関して多くの生徒は意識しているが、うまく応用させながら活動していない状況が見受けられる。	個々の体力に応じて、活動する機会や方法を具体的に示す。	

評価項目	具体的目標（評価小目標）	具体的方策	評価指標	年度末（3月）				
				自己評価		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
読書や文化体験活動に関する指導	生徒の読書量増加を目指す。	読書HRなどを通じて、読書の楽しさを認識させる。	生徒実態調査において、読書の楽しさが認識できたという生徒が60%以上A、60～40%B、40～20%C、20%以下D。	A	B	読書HRのアンケートから90%以上の生徒がよかったと答えている。また、読もうと思っていた本が読めてよかった、HRで読んだ続きを読むなどの感想があり、読書HRを心待ちにしていた生徒が少なくないことが伺える。	現在の時間は確保し、充実感の味わえる読書時間として大切にしたい。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も取組のさらなる充実を期待したい。
	積極的な啓発活動（共慶、掲示特設コーナー）を実施し、生徒の読書のきっかけとする。	共慶や啓発活動、掲示を活発化し、読書への関心を高める。	生徒実態調査において、共慶や放送アピール、掲示板などに興味・関心が持てたという生徒が、50%以上A、30～50%B、10～30%C，10%以下D。	B		図書委員会として「共慶」作成や掲示に創意工夫をしたが30．8%の生徒しか関心が持てていない。選本が作成者の意向に偏っていたり、時期の過ぎたものが多かった。多くの生徒が興味・関心を持てるものを選本したい。	時事に関心を持って選本し、レイアウトなどを、より多くの生徒に興味・関心が持てるよう創意工夫したい。	
学校環境	生徒による施設設備の自主的な整備と美化	普通清掃や大掃除を通して、身のまわりの環境を自ら整える力を身につけさせる。	生徒に自己評価させ、「積極的に清掃活動に取り組んだ」と答えた者の割合が80%以上A、60%以上B、40%以上C、それ以下D。	A	A	「清掃活動に進んで取り組んだ、責任を果たした」と回答した生徒は全体で95.9%であった。多くの生徒が清掃活動に対して前向きに取り組む姿勢を持っている。清掃用具が古くなり、交換の必要なものが増えてきた。	清掃用具を充実させ、清掃を通じて身の回りを整えることによる心地よさや達成感を感じさせたい。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も取組のさらなる充実を期待したい。
	美化マナーの向上を図る。	校舎内での公私の区別をつけさせるため、美化委員によりロッカーの上や靴箱の上に私物を放置しない呼びかけをする。定期的に点検を実施する。	私物が無い状態のクラス数の割合が80%以上A、60%以上B、40%以上C、それ以下D。	B		大掃除の後提出の点検票（計5回提出）を集計した結果、教室のロッカーの上に私物がないクラスの割合は77．0%であった。	今後も私物の整理整頓について、美化委員の呼びかけやクラスの指導を行う。	
		美化委員が作成したポスターを掲示し、ゴミの減量・分別、トイレ使用マナーの向上等の習慣を身につけさせる。	生徒に自己評価させ、「マナーを守っている」と答えた者の割合が 80%以上A、60%以上B 40%以上C 40%以下D。	A		「ゴミの分別・減量およびトイレ使用マナーを心がけている」（「おおむね心がけている」を含む）と回答した生徒は94.5%であった。	今後も美化委員の呼びかけやポスター等による啓発活動を通してゴミの分別やトイレ使用マナーの一層の向上を目指す。	
	防災意識の向上を図る。	年2回避難訓練を実施し、訓練実施前には避難経路および災害時の行動についてのプリントを配布し指導の徹底を図る。	生徒に自己評価させ、教室から点呼場所への避難経路や災害時の行動について理解しているかについて「理解している」と答えた者が80%以上A 60%以上B 40%以上C 40%以下D。	A		予定通り2回避難訓練を実施した結果、82.1%の生徒が「災害時にどのように行動するかわかっている」（「ほぼわかっている」を含む）と回答し、昨年よりも32.3%増えた。2回実施した成果があったと思われる。次年度は避難時間の短縮を課題としたい。	引き続き、避難訓練を年2回実施し、避難経路の確認や防災についての意識を向上させていく。	
広報活動の推進	学校ホームページによる情報公開を進める。	本校Webサイトの更新手続きやページ作成について職員に周知し、スムーズな情報公開に努める。	保護者アンケートによる満足度が70%以上A、50%以上B、30%以上C、30%未満D。	B	B	本校Webサイトを見たことのある保護者は59.5%、生徒64.7%であり、ある程度認知、利用されていると考えられる。	従前どおり、「部活動」や「学校行事」に関するコンテンツの充実とこまめな更新、生徒や保護者がどのようなコンテンツを欲しているかの把握、公開中のコンテンツの周知につとめるとともに、スマートフォンやタブレット端末で利用しやすいホームページの研究に努める。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も取組のさらなる充実を期待したい。
学校評価の充実	授業アンケートなどの活用を図る。	授業アンケートが教員の授業点検にさらに役立つように、趣旨を教員と生徒に周知するとともに設問項目や実施形態を研究し検討を加える。	授業アンケートが役立ったとする教員が70%以上A、50%以上B、30%以上C、30%未満D。	A		教員アンケートで「授業アンケートが自らの授業の点検に役立ったか」の問いに対して「そう思う」「どちらかというとそう思う」という回答が86.4%で（H25は80.3%、H24は75.8%、H23は71.6%、H22は74.2%）、授業アンケート実施の方向性は当面現状で良いと思われる。 問題点として、①複数教員で担当している講座の集計結果が担当教員にとって有効とはいいがたい点、②すべての科目についてアンケートを行うため、質問項目が多くなり、進度やレベル等を問う質問項目を具体化しにくい点が挙げられる。	授業アンケートの実施方法については、現状をふまえた上でどういう形が最善なのか、随時検討、改善していく必要がある。	

評価項目		具体的目標（評価小目標）	具体的方策	評価指標	年度末（3月）				
					自己評価		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
1学年	学習指導	授業以外で1日平均2時間以上の学習時間を確保させる。	学習すべき内容について細かく指導する。また、隙間の時間を有効に活用させる。	授業時間以外の学習時間が2時間以上の生徒の割合が60%以上はA、59～30%はB、29～15%はC、14%以下はD。	C	B	2学期に実施した生徒実態調査の結果、学習時間が2時間以上の生徒の割合は26%で、1学期より10ポイント下がった。また、休日には65%の生徒が2時間以上学習している。	日々の学習の重要性を理解させて、家庭学習を習慣化させる。進路目標をもたせて学習に対する意欲を高める。	一人一人の生徒を大切にして、本校で学んだことを喜びに思えるようなサポートをしてもらいたい。今後も取組のさらなる充実を期待したい。
	生活指導	不注意による遅刻が月2回以上の生徒を3名以下にする。	8時20分着席の持つ意味を考えさせ、安易に遅刻をさせない環境作りをする。	3名以内はA、4～6名はB、7～10名はC、それ以上ならD。	A		不注意による遅刻が月2回以上の生徒は、1学期は5名、2学期は1名、1月は1名で合計7名であった。ただし、2学期になって体調不良の理由も含め遅刻は増加し,8時20分着席を守れない生徒も増えた。	8時20分着席の意義を理解させる。不注意による遅刻の総数で評価できるようにする。	
	生活指導	制服を正しく着させる。	生徒心得や服装規定を正しく理解させ、服装に対する自己点検を徹底させる。	年度末のアンケートにおいて、服装を正しく着ている生徒の割合が、90%以上はA、80～89%はB、60～79%はC、60%未満はD。	B		年度末のアンケートにおいて、いつも正しく着ている生徒の割合が77%、ほとんど正しく着ている生徒の割合が15%であった。課題は、第1ボタンをきちんと留めさせることである。	制服を正しく着ていない生徒に対して、全員の先生方で注意し指導する。制服の意義を生徒に理解させる。	
	進路指導	将来の進路の方向性を確定させる。	HR活動、面談、進路集会などを通じて、様々な情報を提供し意識を高めさせる。	進路希望調査において、進路の方向性を決定している割合が、90%以上はA、89～70%はB、69～50%はC、それ以下ならD。	B		2学期に実施した生徒実態調査の結果、進路の第1希望未定の割合が14%、希望する学部・学科・専門コース等が未定の割合は16%であった。具体的な進路目標を決定している生徒が少ないことが今後の課題である。	進路HRや集会等を通じて具体的な目標を考えさせる。	
2学年	学習指導	授業以外で1日平均3時間以上の学習時間を確保させる。	学習すべき内容について細かく指導する。また、隙間の時間を有効に活用させる。	授業時間以外の学習時間が3時間以上の生徒の割合が60%以上はA、59～30%はB、29～15%はC、14%以下はD。	D	C	調査の結果、学習時間が3時間以上の生徒は7.6%にとどまっており、2時間以上学習している生徒も32.8%であった。	まだまだ受験に対する姿勢が甘いので、今後は進学対策講座などを開催することにより、啓発に努めたい。	
	生活指導	不注意による遅刻が月2回以上の生徒を3名以下にする。	8時20分着席の持つ意味を考えさせ、安易に遅刻をさせない環境作りをする。	3名以内はA、4～6名はB、7～10名はC、それ以上ならD。	A		1月末までの9ヶ月間で月2回以上遅刻した生徒は14名である。月平均にすると1.6名になる。	担任の努力のあり、例年に比べ欠席遅刻の少ない学年であると考えている。	
	進路指導	将来の進路の方向性を確定させる。	HR活動、面談、進路集会などを通じて、様々な情報を提供し意識を高めさせる。	11月の進路希望調査において、進路の方向性を決定している割合が、90%以上はA、89～70%はB、69～50%はC、それ以下ならD。	B		調査の結果、82.2%の生徒が進路の方向性を決定していると答えている。	第3学年をむかえるにあたり、進路実現に向けての一層の努力が必要となってくる。的確な指導と情報発信に努めなければならない。	
3学年	学習指導	少しでも早い時期から進路目標を決定させ、受験を想定した学習に取り組ませる。	HRや面談、集会等を通じて最終学年としての意識を高めさせ、各自の進路目標の実現に向けて、勉学と部活動の両立に努めさせる。	2年生の3学期における家庭学習時間と本年度1学期の学習時間とを比較し、その伸びが2時間以上ならA、1時間半以上ならB、1時間以上ならC、それ以下ならD。	B	B	学習時間調査は2学期以降に行わなかったが、生徒たちは各自の進路目標の実現に向けて立派に努力したと評価できる。またサッカー部が3年生を主力に年末年始の全国大会で大いに活躍、文武両道の範を示してくれたことは特筆に値しよう。	3年生5月の学習時間調査の実施時期は、各クラブが最後の県大会等へ向けて練習に余念のない時期であり、その中での学習時間の増加は評価できよう。逆に言えば、2年次後半からこの姿勢を確立することが、本校生の今後の課題であろう。	
	生活指導	基本的生活習慣をしっかりと確立させ、自己管理についての意識を高め、自己を律する力を身につけさせる。	8時20分着席を徹底させ、不注意による遅刻を防ぐ。	不注意による遅刻が月2回以上の者3名以内はA、4～6名はB、7～10名はC、それ以上ならD。	B		不注意による月2回以上の遅刻者は1月末まででのべ20名であった。月平均は2,2名になる。ただ欠席や保健室利用が例年以上に多く、体調管理に課題を残した学年であった。	自己管理についての意識を高めさせるよう普段から指導するとともに、20分着席のいっそうの徹底を図るべきであろう。	
	進路指導	自己の進路実現に向けて、諦めず、妥協せず、粘り強く努力させる。	生徒各自の進路実現に向けて多様な情報を提供するとともに、学習環境を整え、それに基づいて最大限の努力をさせる。	卒業前のアンケートにおいて、各自の進路実現に向けて学習に精一杯取り組めた生徒の割合が80%以上ならA、70%以上ならB、60%以上はC、60%未満ならばD。	A		2月に実施した生徒アンケートにおいて、進路実現に向けて精一杯取り組めた、よく頑張れたと答えた生徒の割合は82,5%であった。とりわけ学年後半の学習姿勢には、先生方からも高い評価をいただいた。	各自の進路目標の実現のために今何をなすべきかを普段からしっかり考えさせるとともに、低学年次から将来の目標をできるだけ早く持たせる指導が大事であろう。	

評価項目	具体的目標（評価小目標）	具体的方策	評価指標	年度末（3月）			
				自己評価	成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
事務	光熱水費（電気・水道・ガス）の使用量を削減する。	生徒・教職員の健康管理を優先しながらも、電気器具、水道等の不要な使用を監視し、環境への配慮の観点からも光熱水費の使用量の削減に取り組む。	使用量合計が前年度に比べ4%以上削減でA、0～4%の削減でB、0～4%の増加でC、4%以上増加した場合はD。（ただし、育友会設置の空調設備にかかる電気使用量は除く）	A	4～1月の使用量については、合計で前年度比約5．7%の減となった。特に7～9月の夏場の節電による電気使用量の減少（前年比8．2%減）が大きく影響している。 使用量前年度比 電気　5．91%減 水道　5．09%増 ガス　15．14%減	・生徒等の健康管理を優先しながらも、こまめな節電、節水等を習慣づけるようにする。 ・電気器具の更新の際には、電気効率のよいものの導入を検討する。	学校の取組と自己評価に同意する。今後も取組のさらなる充実を期待したい。